

【日本遺産『なんだ、コレは！』 信濃川流域の火焰土器文化と 雪国文化を巡るバスツアー】

2023.11.11-12

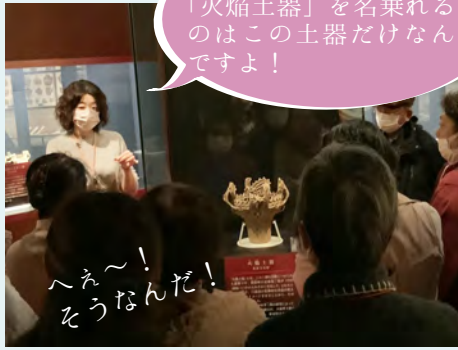
馬高縄文館

元祖「火焰土器」出土の地！

今回の旅の最初の訪問地「馬高縄文館」。展示室の入口には「火焰型土器」の名称の由来となった「元祖火焰土器」が展示されており、みなさんのテンションが一気に上がります！

学芸員さんから火焰型土器の特徴や見方、周辺地域からの影響や時代ごとの変化などを詳しく教えていただきました。

その後、隣接する馬高遺跡も見学し、ひとつめの見学は終了しました。



これが「火焰型土器」の由来となった土器で、「火焰土器」を名乗れるのはこの土器だけなんですよ！



ずらりと並んだ火焰型土器に夢中！

長岡市立科学博物館

長岡の自然から歴史までを網羅。

2つ目の訪問地は、長岡市立科学博物館。入口のホールには、市内から見つかった海牛（化石）の復元模型がお出迎え！インパクト大…！！長岡市内の立地と治水について模型で学び、常設展示の概要をご説明いただいた後、長岡藩主牧野家史料館へ。

その後は、自由見学！自然史から考古学までさまざまな分野が展示されているため、それぞれ気になる展示をじっくり見学しました。



／おっきいなあ！／



新潟県立歴史博物館

縄文の世界へ！

ツアー最後の訪問地は「新潟県立歴史博物館」。見どころ満載の博物館のため、自由見学で楽しみました。バスツアーに参加の皆さんですので、やはり気になるのは、縄文人の四季を等身大で表現したジオラマ。縄文の世界へ迷い込んだような展示に、みなさん感心していました。



春は山菜を採ってるんだね

「火焰土器」と「火焰型土器」

「火焰土器」は1936年（昭和11年）、馬高遺跡で発見された土器のみにつけられた愛称（ニックネーム）です。そして、この土器と特徴を同じくする土器群が「火焰型土器」です。

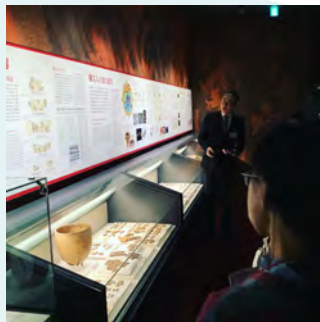
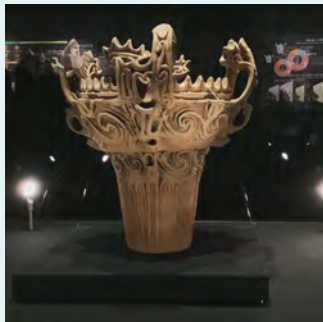
十日町市博物館

あこがれの国宝に会いに！

2日目最初の訪問地は「十日町市博物館」。みなさん楽しみにしていた「国宝縄文雪炎」を見学。国宝室に展示されたその姿に感動…！

前日、馬高縄文館で火焰型土器の見方をばっちり学んだ一行。より深く展示を見学できたようでした。

特別展では、可愛い土偶の数々に夢中に！さらに、ミュージアムショップでは欲しいものがたくさん！と「時間が足りないよー！」という声が聞かれるほど満喫していました。



令和5年度
赤井官衙遺跡群 発掘成果報告

これまでにない規模の 倉庫跡見つかる！

赤井官衙遺跡は東松島市赤井に所在する、今から1300～1400年ほど前の飛鳥・奈良時代を中心とした遺跡です。

これまでの調査成果から、7世紀は関東からの移民集落、8世紀は古代の役所（郡家）または軍事施設（城柵）と考えられ、そこで勤務した役人の墓と考えられる矢本横穴とともに、令和3年3月に国の史跡に指定されました。

今年度の調査は、遺跡東側の史跡地区（館院2地区）から約50m南西に位置する場所において、令和3年度の発掘調査で発見された建物跡の規模や構造、時期をより明らかにすることを目的として、約200㎡を調査しました。

調査の結果、掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡3棟などの遺構や須恵器、土師器などの遺物を発見しました。

このうち掘立柱建物跡が特に重要な発見です。構造は3間×4間の総柱建物で、規模は南北8.8m、東西6.6mであり、柱の配置から倉庫であると考えられます。柱を立てるために掘った穴（掘方）の長軸が1～1.7m、柱の痕跡が0.2～0.3m程と規模が大きく、建物の方向が真北を向いていることから、遺跡が古代の役所として使用されていた時期の建物であると考えられます。柱穴跡の一部を掘り下げたところ、当時の柱材の根本の部分がそのまま残っていました。



この建物跡は令和3年度の調査でも確認されていましたが、今回の調査で3間×4間の大型の総柱建物跡であることが明らかになりました。これまで赤井官衙遺跡の発掘調査で確認された総柱建物跡は2間×2間あるいは2間×3間であり、今回確認された総柱建物跡はこれまでにない構造と規模をもつものです。

この調査成果は、赤井官衙遺跡を研究するうえで重要な発見です。今後も継続的な調査を実施し、遺跡の内容をより明らかにしていきたいと考えています。



▲掘立柱建物跡



▲掘立柱建物跡柱穴

◀令和3・5年度発掘調査区